

L'écriture mémoire des hommes

フニキア... 書ととも...

江苏工业学院图书馆
文字の歴史

ジョシロ シンジ
矢野文夫 監修

知の再発見 京書DIG 見て楽しむ

〔著者〕 **ジョルジュ・ジャン**

1920年生まれ。専門は言語学と記号学。1967年から1981年まで、メーヌ大学教授。主な著書に、フランス財団賞を受けた「世界各国の書物 言葉の喜び」(1980年)、「言葉の中から」(1985年)などがある……………

〔監修者〕 **矢島 文夫**

1928年生まれ。旧制東京外語、学習院大学卒。現在宮城学院女子大学教授。元京都産業大学国際言語科学研究所所長。主な著書に「ギルガメシュ叙事詩」(山本書店)、「文字学のためのしめ」(大修館書店)などがある……………

〔訳者〕 **高橋 啓**

1953年生まれ。早稲田大学文学部卒。仏文翻訳者。訳書に「F.D.G.」(毎日新聞社)、「幻想文学館」(くもん出版)などがある……………

〔知の再発見〕 双書 01

文字の歴史

1990年12月1日第1版第2刷発行

著者	ジョルジュ・ジャン
監訳者	矢島文夫
訳者	高橋啓
発行者	矢部文治
発行所	株式会社 創元社 大阪市北区西天満1-4-2 TEL(06)363-2531(代) 振替大阪 5-57099 東京支店◆東京都新宿区山吹町33-4-11 TEL(03)269-1051(代)
造本装幀	戸田ツトム+岡孝治
印刷所	図書印刷株式会社

落丁・乱丁はお取替えいたします。

© 1990 Printed in Japan ISBN4-422-21051-3

日 本 語 版 監 修 者 序 文

矢島文夫

◇本書は G. Jean-L'écriture : mémoire des hommes. 1987 (Gallimard) の日本語版である。著者ジョルジュ・ジャン氏は1920年ブザンソン生まれ、1967～81年にメーヌ大学の言語学・意味論の教授をつとめ、文芸批評や詩集を計40冊ほど刊行している人で、内容的に本書に近いものでは“ Le livre de tous les pays ”(各国の書物)というのがある。

◇本書の題は直訳すれば『文字(あるいは書字) 一人類の記憶』となるが、古代から現代に至る文字使用の潮流を扱っていることから、邦訳の題は『文字の歴史』とした。

◇今日、世界は日ごとに国際化し、かつての欧米中心主義が崩壊し、欧米の立場から言えばアジア・アフリカなどへの関心が高まるとともに、これらの地域の文化、とりわけ言語(当然、文字を含む)を学習しようとの意欲が高まっている。

◇他方、われわれ日本人の立場で言えば、世界で最も複雑と言われる日本の文字体系を、他のそれと比較しつつ、このままでよいのか、あるいは歴史が示すように、また別の発展を辿ることになるのか、などの文字学の問題を考察する必要があるだろう。文字は言語とともに本質的に“ナショナル”なものであるから、文字学の問題意識は、当事者がどのような文字体系の使用者であるかによって異なってくるのである。

◇そのような意味で、本訳の著者(フランス人)とわれわれではアプローチが異なる場

合も出てくる。若干の事実誤認の修正も含め、本訳では文面の一部を書き直していることをお断りしておきたい。本書の「資料編」について言えば、“La lettre et la ville”

(字母と都市) および“L'art de la typographie” (活字印刷術) は、内容がほとんどフランスおよびフランス語におけるものなので本書では割愛し、そのかわりに「世界の文字体系」を付け加えた。

◆筆者はさきに「文字は言語とともに本質的に“ナショナル”なもの」と記したが、この点について、またこの点から生じている若干の問題点について少し記すことにしたい。

◆人類の言語使用がいつごろ始まったかについては多くの論議がある。そもそも人類がいつごろ出現したかがまず問題だが、このほうは、古人類学（主としてアフリカ出土の人骨の研究による）の発達に伴い、そのおおよその年代は決まりつつあるらしい。今から20年ほどまえには、ほぼ60万年前と言われていたが、今日では200万年あるいはそれ以前と言うように、古いほうにさかのぼる傾向にあるようだ。このころに直立して歩き始めた人類が、今日の定義での言語を使っていたかどうかは議論の分かれるところと言える。いずれにせよ、言語の起源は今のところ実証の域に入っていない。言語に関する限り、実証できるのは、人類が文字を創造してから以後のことにすぎない。

◇しかし、人類が文字を使わない言語文化——記憶による伝承——を行ってきたのも事実である。古代世界で作られた各種の宗教文書・叙事詩——インドの“ヴェーダ”，ホメロスの“イーリアス”と“オデッセイア”など——がそれであり，人類の言語研究（初期の言語学）は，これらを後代に正しく伝えるために生じている。近代言語学は，こうして生じたギリシア・ローマの言語哲学・文法学を基礎とし，これにインド・アラビアの音声学・語彙学などが付け足され，主として西欧で（それぞれの言語を媒体にしつつ）発展してきた。このこと自体，言語学がすでに“ナショナル”なものであることを示している。その結果，言語学の用語（言語を定義するための言語）も，それぞれの言語の意味論的制約をもつことになる。

◇こうして言語学の一部としての文字学にも，同じ問題が持ちこまれる。それは，とりわけ訳語の問題として現れる。たとえば，フランス語の“écriture”（英語の“writing”）と日本語の“文字”は1対1の対応ではない（前者は「文字」以外に「書くこと，書字，書」をも意味する）。西欧語（標準ヨーロッパ語）ではアルファベット文字（本来は22個の子音文字からなる単音文字。のちに母音文字，X = ksのような複音文字が付け加えられた）を中心に据えて文字が考えられているのに対し，日本では中国生まれの漢字（こ

こでは古くに許慎による6分類法がある)と仮名文字(音節文字)の組み合わせによる複雑な文字用法から、西欧の場合とは別の文字学の必要が生じている。

◇こうしてそれぞれ異なる立場にある用語を対応させることになり、それらの用語の意味はさらに複雑になる。言い換えれば、その意味は自然科学の場合のように絶対的なもの(H₂Oでもwaterでも水でも、ここでは同一のものを指す)ではなく、かなりの程度まで相対的であると言わざるをえない。

◇他方、世界は日ごとに“情報化”しつつあり、日本はますます“国際化”しつつある。大国のみならず中・小国の民族文化・異文化を知る必要は増えるばかりだ。情報の伝達・交換は、ある程度までは科学技術が助けてくれるかもしれない——テレビの文字放送(広義での)、多機能的ワープロ(パソコン)、今後さらに改良されるであろう翻訳・字訳・読み取り機などなど。しかし文化記号としての文字をわれわれ自身が学ぶことが、それぞれ異なる文化の伝統をもつ民族間の理解を深める鍵ではなからうか。そのためには、多言語教育とともに多文字教育が必要であり、言い換えれば国際的な“識字”運動を進めるべきではなからうか。

一瞬一瞬消え去ってゆく歴史。

人がその流れをとどめ、保存しようと願うとき、文字はいつも不可欠のものだった。
いつの時代も歴史の記述者、つまり「文字を書く人」には、絶大な力が与えられた。

14世紀の聖職者ジャン・フロワサルもそのひとりだ。

当時、文人の職業は宮中に限られていた。

君主の気高い所業をほめ、宮廷の恋を歌いあげることがその主な仕事だった。

だが、フロワサルの興味は歴史にあった。

当時のヨーロッパを吹き荒れた、百年戦争の歴史だ。

女王はその意図を善しとして、彼を史書編纂の職につかせた。

彼は英国の領土へ何度も赴き、ボワチエの戦いで捕虜となったフランスの騎士のもとを訪ねた。

あの有名な『年代記』の第1巻は、ここから始まる。

そして1400年、ついにその全4巻が完結した。

正しくは『フランス、イングランド、スコットランド、スペイン、ブルターニュ、
フランドル、および周辺諸国の年代記』。

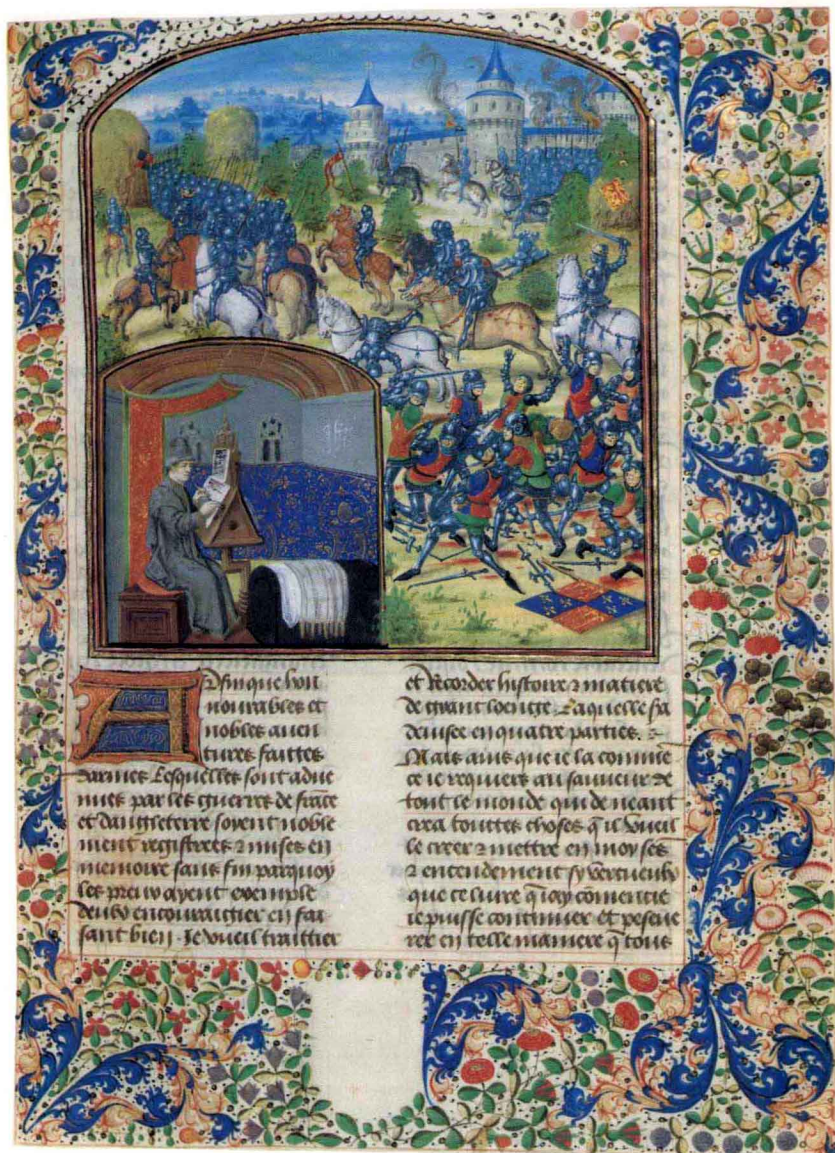
ほぼ14世紀全般を通覧したこの著作の、その大部分は百年戦争の叙述に当てられた。

年代記と史書編纂の天才フロワサルは、歴史のひとこまひとこまに立会い、

どんな細部も見逃さず、その所感を述べている。



机に向かうジャン・フロワサル



Ad fin que soit
 nommbres et
 nobites auen
 tures fautes
 d'aucuns. Lesquelles sont adue
 nutes par les guerres de France
 et d'austriche soient nobite
 ment registrees et mises en
 memoire sans fin parquoy
 les maiors ayent exemple
 deus en couraige et en fa
 sant bien. Je dueil haillier

et recorder hystorie et matiere
 de quant soit ice. Laquelle fa
 deuise en quatre parties. 5.
 Mais ains que ie la commie
 ce ie requier au fauueur de
 tout le monde qui de neant
 aura toutes choses a ic dueil
 se creer et mettre en moy ses
 et encouement sy venient
 que ce liure a icy comence
 ce puisse continuer et reser
 rec en telle maniere a tous

戦いのさなか、机に向かうジャン・フロワサール



Quint le roy au
 estois & ses gens
 et tout son ost
 furent deus les
 fumees des escocois ils furent
 tantost somiez le: trompez
 & auez aux armes et comman
 da que tout homme se deslo
 gast & suyust les hincres
 Ainsi fut fait et se tira chün
 tout arme sur les champs ässi
 comme silz vultussent tantost
 combatre. La cendroit furent
 ordonnees trois grosses batail
 les a pie et chascune bataille
 avoit deux cles de vii. armures

qui devoient demourer a che
 val. Et saiches quod disoit
 quil y avoit. viij. armures
 de ser chualiers & escuiers
 & bien. xvij. hommes armes
 la mortie monte sur petite
 fuguences et lault mortie
 victous envoie p election
 de par les bones visles ale
 saiges. Et si y avoit bien
 xvij. archiers apie sans
 la rübaudaille. Tout ainsi
 comme les batailles furent
 ordonnees on cheuancha tout
 reingie apres les escocois a
 lencdroit des fumees jusqs a

スコットランド討征のため、タイン川を渡るエドワード3世の軍勢

de laide et confort que le roy
d'angleterre deuoit faire a
elle. Dont mesure loys
despaigne mesure charles
germauy mesure otton
ornes estoient esta bliz
sur la mer. A l'encontre de
greuese auceque qua tre
mille germeuoy moult

bien en vint et mil hommes
d'armes et trente deux gros
muscavoy

Le p'uple listoure de la
bataille de greuese q fut
entre mesure Robert d'ar
tois et mesure loys des
paigne. Le. m. lxx. ch.



Ainsi que mesure
robert d'ar tois le
conte de penne
brot le conte de
salle vrm le conte de juf
fort le conte de kenfort le

huon de stanfort le seign
d'apenier le seigneur de
loumpier Et plus aus tres
cheualiers d'angleterre et
leurs gens auceques la
contesse moitfort mafoiet

戦艦どうしが激突した、1342年のガンジイの海戦

bataille. La furent endoz et
 combatus aspienent et ne
 peurent wrier le fais des
 francois. Si y furent pris
 & douloureusement nauve
 mess: thomas digorne et se
 sauua le meho quil peut
 les mess: Jehan de harteuel
 le avecques vne partie
 de ses hommes. Mais la
 greigneur partie deulz y
 demourerent mors nauve
 & pris. Et retourna
 Jecillui mesure Jehan de
 harteuelle avec ceulz qui

eschaper peurent sur la
 ruiere. Si racompta A
 mess: tauguy du chasteau
 tout au long so auanture
 Si eurent conseil quilz
 sen retourneroient deuers
 hantont.

La bataille de la
 roche durien. Et com
 ment messire charles de
 blois fut pris des englois.



プロフ公シャルルが捕虜となった、1347年のロッシュ・テリアンの戦い



En parle de la bataille a meau
 en brye ou les Jacques furent
 desconfitz par le conte de foix
 & le capital de leus. & est
 xv. Chapitre.

Que temps que ces
 mechans gens
 couvrent veint
 d'ent de puce
 le conte de foix & le capital
 de leus son cousin. si enten
 dirent en leur chemin ainsi
 comme ilz devoient entrer
 en france. la pestilence qui
 estoit sur les nobles homes.
 Si entendoient en la cite de

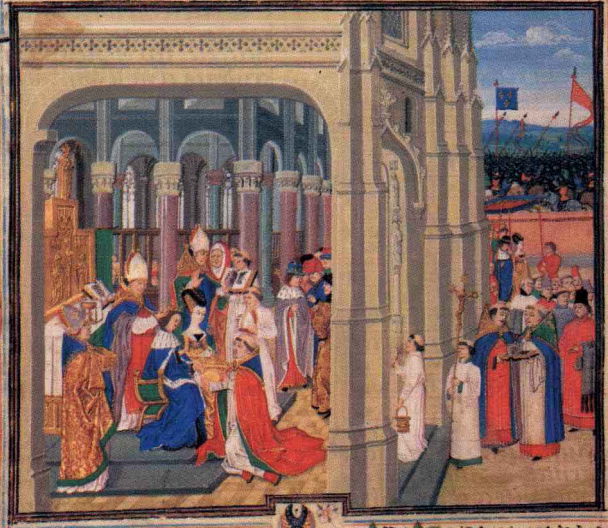
chalons que la duchesse de
 normandie & la duchesse
 dorleans et bien m. dames
 & damoyelles et le duc dor
 leans aussi estoient en
 meaux en brye retraitz p
 celle jacquerie. Lors s'acco
 derent ces deux cheualiers
 quilz yroient veoir ces di
 mes & les confortoient
 a leur vouloit combien q
 le capital estoit anglois.
 mais traites estoient entre
 les roys de france & d'angleterre.
 Si vouloient estre en leur
 route environ. lx. lances.

ガストン・ド・フォワによって粉砕され、マルヌ川に投げこまれるジャックリーの反乱農民

toutes amures et a dar luy
 culautre par luyseige et
 a combatre de grant volente.
 La bataille des gaycours
 assemble a la bataille du
 capital. Si tost q'archibex
 apperut l'assemblement des
 batailles il se bonta hors
 des routes. Mais il dist a
 ses gens et a celui qui por
 toit sabiniere se vo' com
 mande j'ir' uanque vous
 vouez mesfure enis moy
 que vous atendes la fin de
 la bataille. se me puis pas

l'etouner car se ne puis huy
 battre ne estre a une contre
 aulais chualiers qui sont
 par de la. Mais se parut il
 z vng sien esauet avec lui
 seulement. et passa la
 riviere.

Cy parle de la bataille de co
 chereil de mesfure l'etran de
 glanquin pour le roy de
 france d'une part. Et du
 capital de briz nomme
 mesfure ichan de traill y
 pour le roy de navarre d'au
 tre part. Le .xij. n. chap.



1364年にランスで行われた、シャルル5世とジャンヌ・ド・ブルボンの戴冠式

CONTENTS

第1章	文字の誕生	15
第2章	神々の発明	29
第3章	アルファベットの革命	55
第4章	写本職人と印刷術	77
第5章	拡大する文字の世界	101
第6章	解説者たち	121

資料篇	1	世界の文字体系	134
-----	---	---------	-----

— 文字をめぐる考察 —	2	様々なアルファベット	138
	3	技術の影響	148
	4	書の芸術	152
	5	中国と日本の書	164
	6	数学—数の図形的表現—	178
	7	楽譜を書く	184
	8	文字への讃歌	190
	9	「ギルガメシュ叙事詩」	202

文字の歴史

ジョルジュ・ジャン♦著
矢島文夫♦監修



知の再発見 双書01

創元社

